

編集後記

短歌の部

加藤和彦

昨年(2024年)の夏の暑い日、一本の電話を受けました。何と、「文芸ふじさわ・短歌における編集委員を担ってほしい」とのことでした。

勿論、文芸ふじさわ短歌への投稿は、ここ数年行ってきたので、その存在については知らないわけではありません。しかし、編集委員を担うなんてことは、全く思いもよらないことでありました。

そうではありましたが、事情を知るにつけ、事務局としてはだいぶ追い詰められているな、との受け取りも出来ました。電話でのやり取りの過程で、そうだ、なぎさ短歌会と一緒にしている、鮫島美和子さんをお願いしたらどうだろう、との思いが生じました。

早速、彼女に声掛けしたところ、当然ビックリされましたが、私の受け止め同様に、事務局の困り具合を共有する状況に至りました。

そこで彼女から出された提案が、何と私と鮫島さん二人でお引き受けるのはどうだろうか、とのことでした。一瞬虚を突かれた感じがしたが、柔軟な考えだナ、と思われました。この、編集委員を二人で担う、との状況を事務局に伝えたところ、「是非引き受けてほしい」とのこととなりました。

川柳の部

宮塚 肇

元旦の夕刻の揺れに震源は何処だろう?とすかさず入れたラジオから「津波がきます今すぐ避難して下さい」と女性アナが連呼(AI音声?)している。まさかと思いがちでも海岸沿いの我が家である。半信半疑ながらの不安な気持ちに駆られ、テレビで震源を確認した。

「復興の足がかりにとボランティア」(権田藍)、「思いやり重ね支援の輪ができる」(尚風)、「底抜けの笑顔もあった災害地」(島津富弥)・・・年初早々の大地震そして秋の豪雨と災害のダブルパンチを受けた能登地方でした。

そして、「暑すぎて食べるも寝るもひと仕事」(吉野健司)、「温暖化海岸線が溶けていく」(雨宮則子)・・・年々苛烈さを増す温暖化は猛暑を超える酷暑をもたらしました。このままでは「近未来コロギまでも食料か」(ケイ)・・・食料自給率の低い日本にかねがね不安を感じているだけに妙な現実感さえ覚えます。

でも、「大谷に元気を貰うロスの街」(としを)・・・大リーグでの大谷翔平選手の連日の活躍から明るさと元気をもらえた一年でもありました。

二〇二四年は、五十五名の方からの応募がありました。その多くは高齢者でありましょう。「リハビリの一步一步が明日を呼ぶ」(深野いく夫)、「退院日有難いしか出てこない」(熊田松雄)・・・御体調を崩されたことを詠まれた句も散見され同年輩として、他人ごとではない切実さを感じます。

一方で、「朝さんば風が体を吹き抜ける」(愛子)、「生きて行く希望と夢を胸に抱き」(井上朗)、「がんばれと我が身をさする

新たに編集委員を担うに至った事情はこんな経緯ですが、もう一つの要素として、編集委員の役割は、個々の作品の誤字や脱字、その他誤りがないか点検する。そして印刷所に送るための清書することであり、優秀作の選歌等の役割は無い、とのこと。なぜこれを記すかと申しますと、二人は現在なぎさ荘にある「なぎさ短歌会」のメンバーでありまして、佐佐木信綱を曾祖父とする、大野道夫先生の指導の下、短歌を楽しむ一員であるということです。力不足ではありますが、うが、役割遂行に向けて取り組みますので、どうぞよろしくお願い致します。

さて、文芸ふじさわ五十九集に向けての、短歌応募数は二十四名・七十二首でした。各人各様に手書きされた歌を、印刷原稿用にまとめるステップは、鮫島さんと並行して進め、電子文書化すると共に、気になる点として、作者自身に確認したほうが良からうと思われる、八項目を事務局に報告いたしました。

初めてのことでなかなか困難な神経を使う作業でしたが、お陰様で、じっくり歌を読み込むことが出来ました、といったところでしょうか。

応募状況については、ここ数年このレベルですね。更に、登録サークル数も三団体にとどまっています。藤沢市内で活動している短歌サークルは、他に多々あると思われますが。

つまり、「文芸ふじさわ」への関心度・知名度をどう盛り上げるかが、これは不変の課題なんでしょう。

腰と肩」(松江文)・・・高齢者でも、己が身を労わりつつそれぞれお元気でおられます。

さらに、「人生ははかないと言いつく食べる」(市川嘉紀)、「おいしいね何でも噛める歯に感謝」(マリ)、「土用の丑に義務はないのに鰻食べ」(赤堀晶子)「禁煙のあの手この手も使い果て」(幡多純)、「食欲はないがお酒は別の口」(田中邦彦)、「大将の気分で開ける縄のれん」(戸澤千鶴)、「道の駅両手いっぱい句を買う」(古木光江)、「おいしいを分かち合えればさらに美味」(みゆき)・・・お酒も煙草もそして食べる方もまだまだ旺盛です。時には、「侘しさもまたごちそうと山の宿」(岡本昌代)、「食べる買う景色二の次バスター」(ケイ)・・・旅を楽しまれています。

しかし、「検査して異常見付けて恙ない」(井上朗)、「大安に検診結果聞きに行く」(小野敬子)、「老眼のメガネで足りず虫めがね」(水城茂子)、「老眼鏡ふえてひとつは首にかけ」(吉田節子)、「老化です医師の一言やる気折る」(西村雅子)・・・身体の衰えは避けられません。検診を怠りなくいつまでも元気でいたいものです。

「あじさいは忍者を越えて七変化」(菅沼雅彦)、「踏まれてもすぐ起き上がる草の意地」(妹尾安子)。「虹紡ぎ横糸にして明日を織る」(鈴木有)、「庭ごしのとなりの桜ひとり宴」(船越しのぶ)、「雨の日はドレミドレミのトタン屋根」(村田和彦)、「目の前を秋が横切る赤とんぼ」(村田憲治)、「土砂降りの中で耐えてる花一輪」(守田貴美子)、「カタツムリ勝手気ままなワンルーム」(玲和)・・・人の世はともあれ自然は変わらぬ行まいで慰めてくれます。「みんな違ってみんないい」(二〇二五年もそれぞれの思いを五七五に詠んだ佳句をお待ちしております)。

(二〇二四年十二月)

俳句の部

堀 口 みゆき

今回は昨年に比べ、応募者が減少したことは残念ですが、俳句に寄せる関心が高まっていることは事実です。編集の段階で気づいたことは五句の中あるいは同じ一句の中に旧仮名と新仮名が混じっていることが挙げられます。ほかに感じたことは、疵のない句を作ろうとして難難な内容、平凡な内容の句をつくりがちになることです。今回、このことについて書かせていただきます。いわゆる、類想、類似性のある句といわれる句です。俳句は字数が少ないため、他者と類似した句を作ることが多くがちです。同じ物、同じ場面、景色を見た時に感じ方が似ていれば、同じような表現をしてしまうのは、珍しいことではありません。俳句、短歌のように言葉が短ければ短い程その傾向は大きくなりますので、無意識のうちに類似してしまします。他者のフレーズが頭の片隅にある場合、類似句になる可能性が高いのですが、それには二種類あると考えます。

- 1, 偶然に作品の内容が一致した場合
- 2, 故意に真似した場合

かつて、私の所属する結社「鷹」の吟行会で故飯島晴子氏達と等々力溪谷周辺を同行した際、仏足石の傍で句を作りました。その時、発表した句は「小鳥くる仏足石に水溜り」でした。しかし、その後、鷹誌にその句は載らず晴子氏の「小鳥くる仏足石に水湛へ」が載っていました。

下五の「溜り」か「湛へ」かの違いだったのです。私は尊敬

五行歌の部

鈴木 春 野

「五行歌の部」へのご参加、ありがとうございました。昨年12月10日にノーベル平和賞が「日本被団協」に授与されました。私たち五行歌「ハマ風の会」の代表の松本希雲（94歳）は長崎で被爆、生涯忘れられない生き地獄を目にし、原爆病特有の症状にも、また死に対する恐怖、爆心地で見た幻影にも苦しめられました。大変な体験の最中お姉様の主治医で「この子を残して」の著書でも有名な永井隆先生との交流があり、励ましを受けたこともきっかけで現役リタイア後から語り部活動を続けて来しました。

語らないと
知らないになり
やがて
歴史の中で
なかったことになる

生存中に被団協が
平和賞を受賞
大きな喜びと同時に
核廃絶への
険しい道のりを思う
(五行歌2首は松本希雲作)

平和賞の受賞は、その活動を近くで見聞きして来ました私たちにとりまして大きな喜びです。グローバル化した今、戦争は当事国だけでなく、その国と繋がっている世界中の経済にも甚大な影響があることを、ロシアのウクライナ侵攻でも実体験させられています。全てを破壊する戦争は、映像を視るだけでも、心には「恨み、憎しみ」しか残らないものと考えてしましますが、語り部の方々はそれを超越して平和へ

する飯島晴子氏の句が大好きでしたので、私の句が湘子師に落とされてもなぜか嬉しかったのです。そこには晴子氏へのリスペクトがあったからです。仏足石の場合、やはりこの水は「溜り」より「湛へ」がふさわしい。故藤田湘子師は暗黙のうちに私にそのことを教えたかったのではないかと今になって思います。

同じようなものにオマージュがあり、音楽、絵画等においても尊敬する作者の作品の影響を受け似た作品になることをさします。鎌倉の建長寺の境内には夏目漱石の句とされる

「鐘つけば銀杏散るなり建長寺」 漱石 明治二十八年 九月六日
が建っており、これは正岡子規の代表句ともいえる

「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」 子規 明治二十八年十一月八日
のもとになっている句と言われ、両者が「愚陀仏庵」における親友であったことから友情で作られた句とされています。

類想であつても意図するところが違い卓越したものであれば、独自のものとして認めてもよいのではないかと思います。

の活動に取り組まれ続けておられ、その想いの崇高さに心から敬服いたします。

日本は今年、第二次大戦終結後80年ですが、今世界を見渡せば核保有国は多数で、覇権主義、自国第一主義のリーダーが多く、核使用の脅威にさらされています。世界で唯一の被爆国として、日本政府は世界平和にもっと力を込めて働きかけて欲しいものです。

語り部活動、平和運動が更に広がるようお願いながら、個人としても誰もが人間として、命の重さ、平和の尊さ、地球に住むありがたさに、もっと想像力を働かせる賢さが必要だと痛感します。

普段の五行歌の歌会では、時事問題をテーマにした「社会詠」の作品も多く投稿されます。身近な生活の中から生まれる五行歌は、「あの頃こういうことがあつてこんな風に考えていたんだ」と、日記のように当時の社会や自分を振り返ることもできます。

現代詩の部

山田 美智子

「文芸ふじさわ」第五十九集を皆様のお手元にお届け出来る事に感謝申し上げます。

辰年は漢字一文字では「金」でした。悲喜交々な世の中にあって、文芸を愛される皆様には、どの様な一年間であったのでしょうか。今集の作品からひもといて参りましょう。

タイトルから思わず北欧を連想してしまいました。が、発祥の地はなんとバリのようです。「スノードーム」は、硝子越しにはなく、硝子のなかで見られる幻想的な世界を、現実から離脱した我が、現実の心象風景に詩的メタファを駆使し、表している作品のようです。終連の二行が良く効いています。「友よ」は、生きとし生けるものの命は、神様にしかわからないものである事を、あらためて気づかされます。命の大切さが伝わります。「ある日」の、フリンジをゆらゆらさせてのフリーズが、この作品の色香を表しています。ダンディな男性なのでしょね。ときめく思いが伝わってきます。「小さな思い出」は、幼い頃の自然に溢れた様々な体験が、心の栄養になっている事を教えてください。正に三つ子の魂百までですね。

「自分以外の誰かである理由」言葉数の少ない詩です。平明な一行に込められた感情が交差しながら、内面へ導きます。心や精神面の有り様は、情報量の多い現代社会において、多種多様に善し悪しを判断する間もない程、回り回っています。内向的に自問自答する時間が必要であり、自らの立ち位置を確かめる事も大切です。生きづらさは世の中を渡る上で、種々

の誘因により誰しもが体験する事です。が、山あり谷ありを、もがきながら、乗り越えていけるものです。作者がしっかりと立っている姿が見て取れます。四、五連の「も」と「は」の使い分けがこの詩の核。そつと見守ります。「辻堂新町の思い出」地域住民の方々との交流、親睦は日々の暮らしの中でとても大事な事です。最初の一步を踏み出す勇氣に拍手をおくりします。「こんこん」、日本語は漢字、平仮名、母音子音といろんな表情を見せてくれます。音楽文字と音節文字が組み合わさった日本語はすばらしいです。イギリスのマザーグースの童謡を想い出します。声に出して口誦すると、なかなか遊びのようです。ふと、八木重吉の自然や折りの短い詩を思うのは私だけでしょうか。

皆様、これからも継続して書き続けて下さい。次集でまた紙面を通してお会いできますよう、心から願っています。

随筆の部

新田 愼 二

今回34名の応募があり、若干減となりましたが、昨年規模の応募者を保つことができました。応募者のうち27名の方が昨年に続いての継続投稿者で、今年も頑張って投稿されたことに敬意を表します。新規応募者が少ないのはこの冊子の課題で、冊子の存在、募集をしていること等を如何に周知させるか、せつかくこんないい企画があるのですから、市民として編集者として、スタッフの皆さんと共に考えたいと思います。

しかし作品を読む作業は、編集者としては実に楽しいこととて、もうすっかりお馴染みの名前と文章が出てくると、旧知の人に出会ったような気持ちになり、さて今回はどんなテーマで語りかけてくるかとワクワクします。今回も身辺雑記、藤沢の歴史、文学者のこと、育てている野菜、旅行記、社会時評、平和への思い、友人のこと、若き日の思い出、など多彩にわたり投稿いただきました。高齢者の文章は、経験による専門性の高いものや、藤沢の歴史の詳述、よくぞお書きになったもので、多彩で味わい深く読ませていただきました。

いまやSNSの時代で、スマホなどで簡単に発信できるため、若年者の投稿が少ないのは予測されることですが、長文でさえAIなどの更なる進化により、文章が作られる時代となると、「随筆」など書く人がいなくなってしまうのでしょうか。

私はそう考えませんが、伝えたいこと、それを文章にまとめる、

その思いは決して失われることはないと思います。そこに随筆は存在します。「随筆」は作者自身が書いたものであって、他のなに人にも書くことができないものであるからです。個人にはその人の感性があり、歴史があり、発想があるからで、それは機械では代わりえないものです。書いたものを来年読み返して起こる懐かしさや愛おしさは、その時の作者自身であるからです。

この国は季節が豊かで、それらが次々に変化していくものですから、短いテーマの随筆が古くより親しまれてきたのだと思います。私たちは「枕草子」「方丈記」「徒然草」など随筆の名作に恵まれてきました。

随筆を書く流れは、「発想をめぐらす」「テーマを決める」「全体の構成」「出だしのことば」「文章のリズム感」「結びのことば」「題名」そして「もう一度読み直す」、そういった作業により素晴らしい文章が完成します。

どうかご精進ください。来年もまた作品に挑戦していただくことを楽しみにします。